



殺しのルート13
ミステリー傑作選・特別編2
日本推理作家協会 編

ころ
殺しのルート13 ミステリー傑作選・特別編2

につぼんすいり さつ か きょうかい へん
日本推理作家協会 編

© Nippon Suiri Sakka Kyokai 1990



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1990年7月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-184720-1

江苏工业学院图书馆

講談社文庫

藏書章

殺しのル 13

ミステリー傑作選・特別編 2

日本推理作家協会 編

講談社

目次

鎖の環	高木彬光	七
わるい風	鮎川哲也	七四
死体置場は空の下	結城昌治	八九
年下の亭主	新章文子	一二五
冷えた茶	佐野 洋	一四七
螺旋階段	邦光史郎	一七三
チャイナタウン・ブルース	生島治郎	二二〇
現代呪法	日影丈吉	二五九
獣に降る雨	菊村 到	二八九
大人の城	飛鳥 高	三三五
十五年後の或る日に	南條範夫	三八四
拾われた男	小松左京	四〇八
穴の眠り——加地公四郎の場合	土屋隆夫	四四三

序 文

ミステリは、もちろん、エンターテインメントですが、このエンターテインメントを日本語に訳すと、娯楽小説とするのがふつうのようです。

しかし、私はあえてこれを『ご馳走』と訳してみたいと思います。生活する上で、どうしても食べなければならぬわけではないが、食べてみた場合にはおいしくなければならぬというのがご馳走の条件でしょう。

よいことを忘れて、味の世界に没頭できるという意味でも、エンターテインメントはご馳走でなければならぬし、ミステリもそうだと思います。

ご馳走には一品料理からフル・コースまで、さまざまな種類がありますが、ミステリの短篇というのは、まさに一品料理の味と言えましょう。

シェフが限られた材料の中から、自分の舌に合った一品だけの料理をつくりだす——推理作家が短篇を書くときは、同じような心境になるものなのです。

そして、自分の舌が感じたのと同じ味わいを読者が感じてくれたときの喜び。

多分、この短篇集に並んだシェフたちも、同じことをあなたに期待しているに違いありません。

一九九〇年五月

殺しのルート 13

ミステリー傑作選・特別編
2

鎖の環

高木彬光

著者紹介 大正九年青森県生まれ。昭和二十三年「刺青殺人事件」で推理文壇に登場。二十五年、「能面殺人事件」で探偵作家クラブ（推理作家協会）賞を受賞。以後、法廷、経済、歴史物に健筆をふるう。主作品に「破戒裁判」「白昼の死角」「成吉思汗の秘密」。

—

空は墨^{すみ}を流したように暗く、陰鬱^{いんうつ}そのものといった夜だった。風はあまりないのに、涼しさをとり越して肌寒いほど、とても七月の気温とは思われなかった。

今年は全国的に異常な天候が続いている。ここ、神戸の港も、日ごろの活気を失って、身をちぢめて眠っているようにさえ見えた。

ほかには人影もない埠頭^{かど}のコンクリートの上に、重い足音をひびかせながら、港のパトロールを続けていた二人の警官は、三井^{みつゐ}棧橋^{さんばし}の近くの貨物引込線のあたりで、どちらからともなく立ち

どまった。

「まったくいやな天気だな」

一人がポケットから『いこい』を一箱ひっぱり出し、相手にぬかせてから、自分も一本、口に
くわえた。

「ああ、嵐が来そうな感じのする夜の港ってえのは、いやなもんだな」

相手はゆっくりマッチをすりながら、

「おれのおやじは船乗りだったんだ……こんな晩、おやじが留守だと、おふくろは心配そうに、
海ばかり眺めていたもんだ。おかしな話さ。おやじの船は、この神戸の街から、ずっと離れたと
ころにいる。ここが大嵐になっても、おやじの船が危ないわけではないのにな」

「わかるような気がするよ」

相槌を打って警官は、吸いさしの煙草をすてて、靴で念いりに吸殻をふみにじった。

「さあ、早いところ一まわりして来ようじゃないか……おや」

かすかな物音に気がついて、彼は右手に持ちかえた懐中電灯を倉庫の一角にむけた。

「ありやなんだ？」

二人は鈍い光の輪の中に浮かび上がった黒い影を見つめ、一瞬またそちらから眼をそらして、
たがいに顔を見あわせた。そして、その次の瞬間には同時に、その方向へ走り出した。

引込線と倉庫の間のちよつと見とおしの悪いところにうずくまるような格好で、一人の男が倒
れていた。懐中電灯の光は、そのあたりにとび散った血痕を照らし出し、さらに三十二、三ぐら

いの歪んだ男の顔を浮かび上がらせた。

「こりや……ひどい……」

一人がむかついたような顔をしてつぶやいた。もう一人はいくらか冷静だった。

「喉を切られている……後頭部にも一発食ったようなあとがある……」

それから彼は腕時計に眼を走らせ、報告書の文章を暗唱するような調子で、ひとりごとをいった。

「死体発見日時、七月十四日午後十時七分」

二人の警官の急報によって、現場へかけつけて来た栗原貞春警部補以下の捜査陣、鑑識課員たちは、ただちに活動を開始した。写真撮影のストロボの光が各所にひらめき、刑事たちは獵犬のようにあたりをかぎまわった。

栗原警部補は、死体のそばに仁王立ちになって、鋭い眼であたりを見まわしていた。平巡查から強殺専門でたたきあげてきた彼は、人一倍豊富な経験と鋭いカンを持っている。豹のような眼の中で自信が光を放っていた。

「被害者は、後頭部の一撃によって、抵抗不能の状態になっていたのでしょう」
鑑識課の一人が立ち上がって報告した。

「スパナか何か、そういったたぐいの鈍器が使用されたのでしょうか……あとはごらんとおりです。刃物は出刃包丁か登山ナイフか——そうとう鋭利なやつですね。死後二時間から三時間ぐら

い経過しています。いまのところ、わかるのは、だいたいそんな程度ですが……」

警部補はかるくうなずいた。

「抵抗不能——不意討ちを食わせたとなると、女でもやれないわけはないな？」

「ええ、かなりの荒わざに見えますが、そういうえるでしょうね」

栗原警部補はしゃがみこんでいま一度死体の子細に眺めまわした。グレイの夏服は、外国物の生地らしく見えたが、かなりくたびれ、袖口そでぐちのあたりはすりきれていた。

上着の下には、青い、そうとう派手はでなスポーツ・シャツ——もちろん、ネクタイはしめていない。アイボリー色の靴は、何日もみがかなかつたらしく、薄ねずみ色に汚れ、洋服同様、そうとうにいたんでいた。

死体の顔だちそのものは、なかなか整っていて、インテリ臭さも感じられた。しかし、警部補は直感的に、そのうえに、すさんだ生活の影を見てとっていた。

「サラリーマンくずれというところかな」

彼はひとりごとをいうと、上着の襟えりを返して、「須川すがわ」というネームを読みとり、それから全部のポケットの点検を始めた。

「上着の内ポケット……現金が四千五百円、裸のままだ。パーカーの万年筆が一本、黒い手帳一冊……」

警部補は念のために、手袋をはめた手で、この手帳をばらばらとくってみた。一見したところ、中には妙な記号や数字がしるされているだけで、どういう意味か、ちよっと判読できなかった

た。持主の名前も見あたらない。

「中に名刺が五枚はさんである。ぜんぶ違う名前だから、本人のものじゃないだろう。……しかし、あとで何かの役にはたつかもしれないな。次に上着の外ポケット……汚いハンカチが一枚にちり紙、これだけか？」

強盗殺人——という線は、現金の発見から疑いがうすくなってきた。動機は何か——と頭で思いながら、警部補は口で続けた。

「ズボンには小銭が二百三十五円、これもばらか。『ハイライト』一箱、バー『港の灯』のマツチ一つ、皮の靴べら一つか」

「身元がはっきりするような品はないようですね」

そばにいた若い北川刑事が、なげくような調子でいった。

「いまのところはな……まあ、身元を洗い出すのにも、それほど手間はかからんだろうが」

警部補が自信ありげにいったとき、勝浦刑事が、ハンカチの上に何かをのせて近づいて来た。「主任、あそこにこんなものが落ちていましたか」

それは皮製の小銭入れで、M・Nというイニシアルが金文字でおしてあり、そのまわりには血痕が付着していた。警部補は鋭く眼を光らせた。

「M・Nでは須川のSとはあわないな。この被害者は金をみんなばらで持っていて、財布も小銭入れも使っていた様子はな。靴べらに使っている皮よりは、こっちがずっと上等らしいな」

「つまり、この小銭入れは、犯人の遺留品だということになりますかな」

北川刑事は勢いこんだようにいった。栗原警部補はかるく何度かうなずいた。「少なくとも、その可能性は大きいな……」

二

同じ夜の午後十一時半ごろには、神戸港からほぼ真北の地点にあたる北野浄水場付近の裏山に、柴田隆二警部補を主任とするべつの捜査陣が出動していた。

まだ学生気分の抜けきっていないような感じの若い柴田警部補は、眉をひそめて、女の死顔を見つめていた。

死体は木立の草むらの中に、ほうり出されたような格好で横たわっていた。二十前後かと思われる若い娘で、生きているときには、いかにも愛くるしい感じだったろうと思われる。白いブラウスと、淡いグリーンのスカートという清楚な身なりも、いまとなつてはいちだんと哀れをさそつた。

「死因は絞殺です。暴行ないし抵抗の形跡はほとんど見あたりません。解剖してみなければ確かなことはわかりませんが、睡眠薬でも飲まされていたのかもしれないね……」

柴田警部補は、こういう言葉を聞きながら、ふつと自分の恋人のことを思い出していた。

「死亡推定時刻は、まず九時半から十一時の間と見てよいでしょう。ずばりといくなら、十時ちよつとすぎといたいところですよ」

第一線で鍛え上げた連中のこういう断言は、若い柴田警部補には神様のお告げのように思われ

た。少なくとも、いまのところ、この言葉に批判をはきむ根拠はなかった。

死体の身元はすぐにわかった。近くに落ちていたハンドバッグから、身分証明書や定期券などが発見されたのである。

杉岡^{すぎおか}令子^{れいこ} 二十一歳

(昭和十九年六月三日生)

勤務先

三和商事株式会社

(神戸市^{ふかあ}葺合区磯上通七ノ八)

現住所

神戸市生田区北野町三ノ八一

山水荘アパート

いっぽう柴田警部補は、現場からは特にこれという手がかりも発見できなかった。犯行がこの場所で行なわれたのか、それとも死体が運ばれて来てここへ捨てられたのか、それさえすぐには断定できなかった。

死体を発見したのは、近くの家に住んでいる夫婦で、どう見ても、事件には関係がなさそうだった。彼らは近道をして空地^{あきち}を横切り、家へ帰ろうとして、偶然、死体を発見したのだった。

被害者の住所が、現場といくらも離れていないので、柴田警部補は、服部^{はつと}という刑事を山水荘へ走らせた。服部刑事はまもなく、中年の男と、被害者と同年配ぐらいの娘をつれてひっ返して来た。

男のほうは坂口^{さかぐち}三郎^{さぶろう}というアパートの管理人で、蒼^{あお}ざめた顔で死体をのぞきこみ、

「杉岡さんに……間違いありません……」

と重い口調でいっただけだったが、娘のほうはたちまち両手で顔をおおって、

「令ちゃん……令ちゃん……どうして……こんなことになったの……」

とヒステリックに泣きくずれた。

服部刑事は、柴田警部補の耳に口をよせてささやいた。

「彼女は被害者のとなりの部屋の住人で、深井弘子（ふかいひろこ）といひます。勤め先は違ひますが、被害者とはかなり親しくしていらしひのです……彼女を尋問すれば、いろいろな情報（じほう）がきき出せるかとも思ひますが」

「そうだな。でも、いまは半狂乱（はんきやうらん）みたいだし、今夜はもう遅いから、正式な尋問は無理だろうな。若い女性を、午前の二時や三時までひきとめておいては人権問題にもなりかねない……ところで、被害者の杉岡令子の家族はどうしてゐるのかね？」

「岡山が実家だといひますが、こちらには、べつに親類もいないようです。アパートへはゐるときの保証人は、会社の上役がひきうけたようです。私もこつちへ来る途中、管理人にちよつと聞いてみた程度でしたが……」

柴田警部補は二、三度かるくうなずくと、服部刑事に二人を送りとどけるように命じ、それからまもなく、死体を収容して、現場をひきあげて行つた。

一晚に二つの死体がべつべつに発見される——これはこの港町神戸でも、めつたに起こることではなかつた。

しかし、この段階では、二つの死体を一つに結びつけて考えたものは一人もいなかった。二つの事件は、ばらばらに発生し、そしてべつべつに発見されたのだった。二人の被害者の間には、ほとんどなんの共通点もなかったし、犯行の手口もそれぞれちがっていた。したがって、ごく当然のことだが、捜査もそれぞれ別個に独立して行なわれることになった。栗原警部補は死体の身元割り出しに全力を注ぎ、柴田警部補は死んだ娘の周辺を洗いはじめたのである……。

三

男の身元割り出しは、予想以上にかんたんだった。捜査の第一着手が、みごとにきまったのである。

栗原警部補は、被害者の持っていたバーのマツチに眼をつけて、その夜のうちに、北川刑事と古賀^{こが}刑事を『港の灯』へ走らせた。

男は殺される前に、このバーへ寄ったのかもしれないから、できるだけ早く、そこを調べてみるのに越したことはなかった。

二人の刑事は、鑑識課員が大急ぎで用意してくれた写真を持って出かけた。撮影してすぐに陽画の出ってくるポラロイド・カメラで撮ったものだった。

『港の灯』は、けばけばしく、安っぽい趣味で飾られたバーだった。六、七人の客の中には、船員らしい顔も見えたが、とりたてて港町のバーらしい雰囲気^{かんいき}があるわけでもなかった。

「いらっしやい……」